

La Structure du genre et la sexualité dans le Japon des Tokugawa(1600-1867)

Watanabe, Hiroshi
4 juin 2018

1. Le régime des Tokugawa et la « virilité »

Nanshoku Hiyoku-no-tori (1707)



deux couples amoureux homosexuels
devant le symbole d'amour perpétuel

2. Le régime des Tokugawa et la sexualité

かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの



かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの

かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの
かきつばたのさかきつばたの

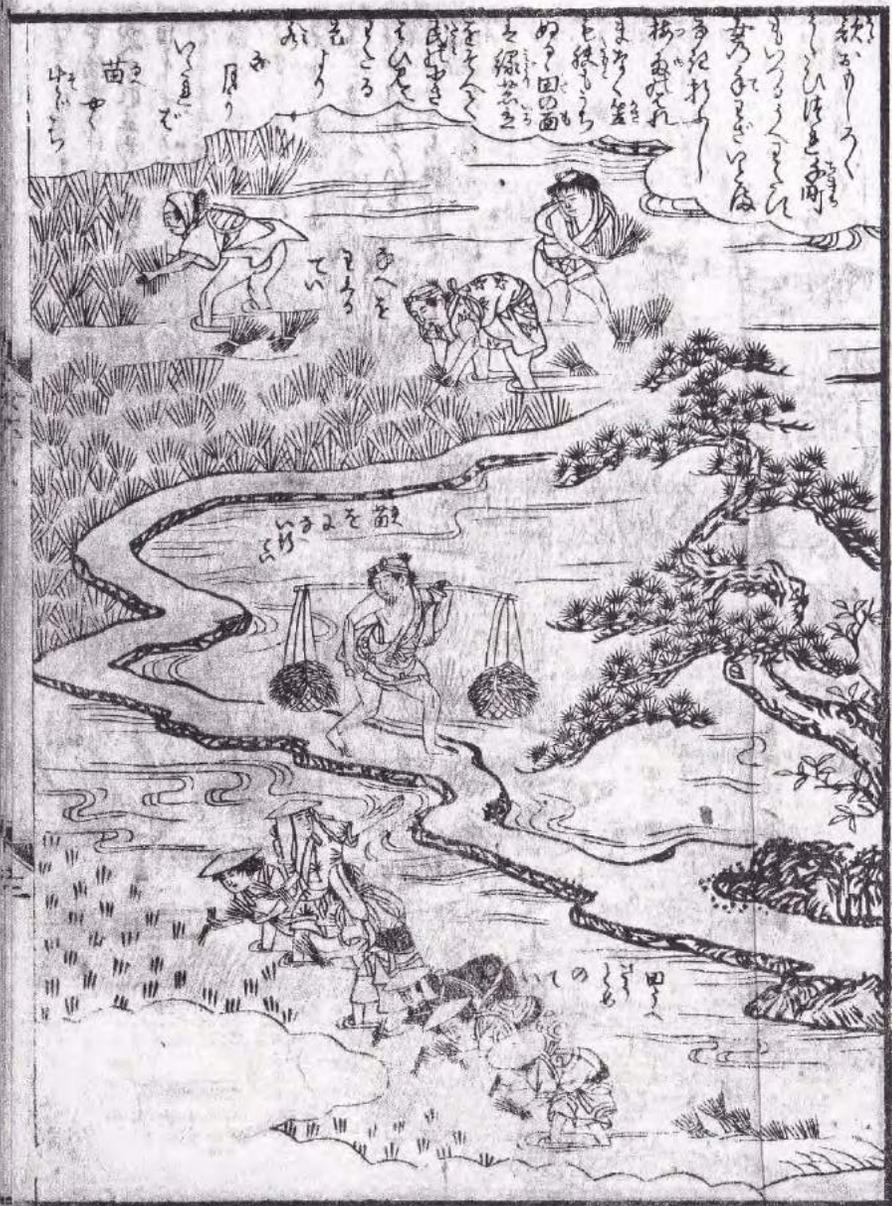


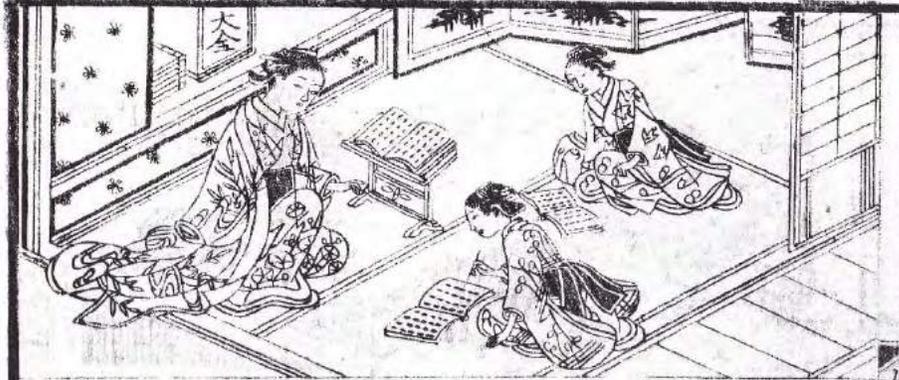
この写真の作成者 不明な作成者は [CC BY-SA](https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/) のライセンスを許諾されています



3. Le régime des Tokugawa et la « féminité »





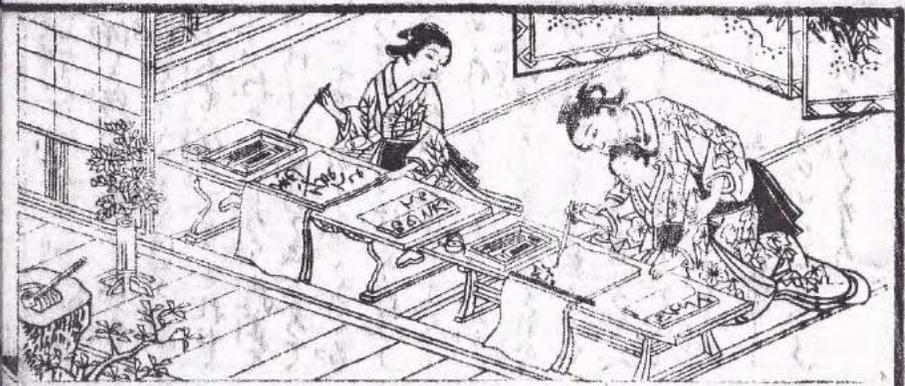


男子おんこも親おや
 乃教おしせらる
 父母ふぼ
 親おや志こころの
 育そだむるまの



家いへのち必かならず氣き
 通とほるまのま親おやはめ
 可た得えぬまのま難たがい
 六むのむ男おとことお女めはな

それ未だおぼろしい小僧は
 はよくこの世に生れし
 こそんごのこころの中へ
 こころのこころを
 乃ちそのこころのこころ
 おし行をあらそひに
 むくまをありけり
 の心もあらそひに
 はらりて
 つらうて
 てとらうて
 けありて
 あれと
 本乃
 といふ
 といふ
 といふ



申^{まう}思^{おも}くか
 終^{つい}にけ^こ出^いて
 恥^ちと曝^{はく}け^け女子^こ女^に父^ち
 母^は家^け別^{べつ}を^を此^こ事^じ法^{ぽう}
 謂^いて^て男^{おとこ}中^{ちゆう}女^{にょ}ん

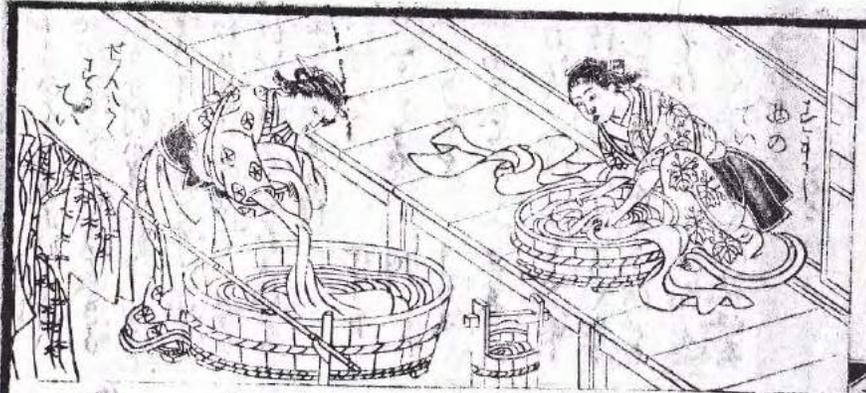
思^{おも}ふと^と女^{にょ}己^{おのれ}思^{おも}ふ
 誤^{あや}り^り生^なま^ま是^この^の皆^{みな}女^{にょ}子^こ
 此^こ親^{おや}乃^のと^と人^{ひと}を^を見^み
 故^ゆに^に刺^さす
 一^い女^{にょ}ら^ら答^{こた}へ^へり^りも^も心^{こころ}の



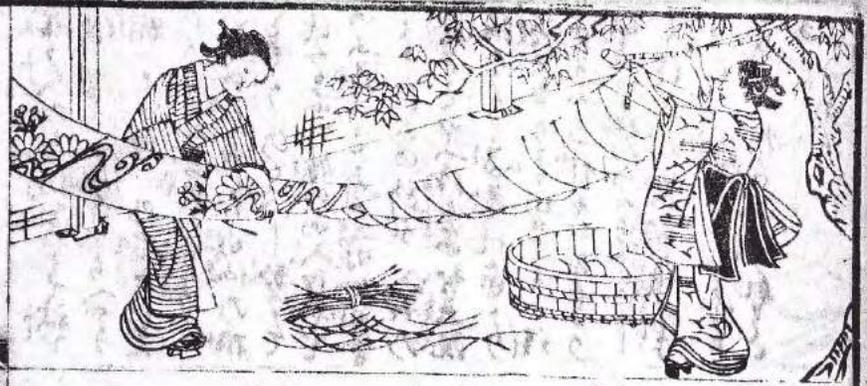
一女子の難時より
 激しく
 唯如く順ひて貞信
 小情深く静かなると
 遠方なる女子
 一女子の難時より

うねりひたりハ女子を
 見ればいふも同じく
 とかく美し世間より
 小お堅う三浦流を
 女よりのあつた
 女を重きなりとも
 らみあつたあぢ
 女王の人の
 ありやいれひ
 多のうに
 をかひりけ
 くさる酒や
 正月に
 とあつた
 衣合の
 ものを
 は

男女のおと心
 七修神も
 礼下男女の
 一女子の難時より



一葉の心
 洞くそ乃下知に
 路より一史同とある
 正一の昔より
 通言珠の海



毎礼をり史の後
 立然と記の心
 眼厚く思得る
 その心は送へる
 女は史の心

水引ハ坪人の贅に
 これとつらやう枝葉紙又
 奉書紙の長程に海ひく
 一すくりになるりこれ
 とひひり長長一尺物に
 多きく米浦めにひく
 どのか一解をりて
 を絞引日にかて後り
 半分に懸脂とわらさ
 赤白のあしといふ白さ方
 をかきひるて近世八全
 標金置汁をわりて
 いんり細谷海寄りて十
 條とにりて一把に
 又赤み紙をのりて
 ひ編りざるを赤水
 といひひりくるふ
 水さかり

赤茶酒あかちやが
 多くおほく呑のみへるにはあ
 茶枝小瓶ちやえだこびん浄じやうる
 王おうがはろう深ふかむるか
 本ほんとん聽きへると



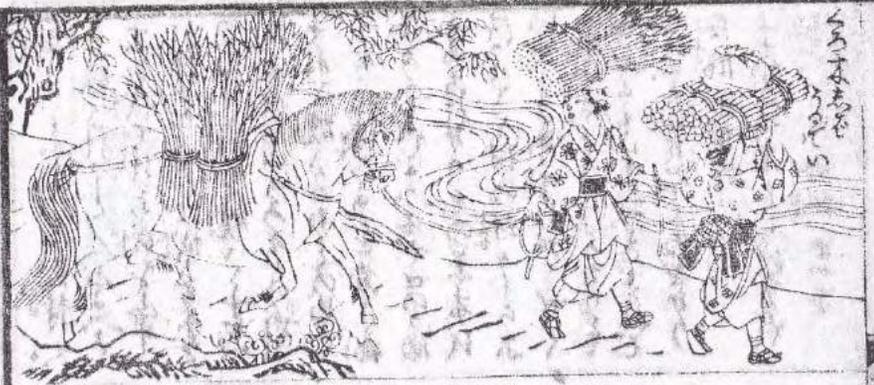
交ま寺てらをと都みやこく
 人ひとんおほくあつ
 中な新あらた交まへる十じゆ歳さい
 本ほんあつ内うちのな海うみらに
 乃なほへるにはのな



麻をむく一麻と申す人
 はくろ多かりこれをも五町と
 申すは麻を位申す人共
 用るもの之麻の尺刻は
 一尺一寸今の一尺之要申
 の用を申す麻といふは
 乃のりの中階なり長崎
 へあると朝鮮麻といふ
 うり地店ふあり骨事用
 石列よりせんや麻多
 康をばくす所と云ふ
 の麻も麻をえとて根本
 も城殿駒お氏これと繋
 ず麻堂は康の日本より申
 せりていふ
 其阿弥折と
 いふなり

うち
 打解る物
 正行へる男女の
 海と國すべし
 用有と云ふ
 男に文をて無
もの
かきり
かん
みよ
い
か
あ
り
と

一
 身は
 深
 色
 目
 屋
う
ぎ
り
の
こ
ら
う
そ
め
と
ち
か
い
り
と



くろくまの
くろくまの

法と迷由へいね
 親もも娘と大
 切に心ひ孝行を
 為へい嫁して後
 親の家よゆく



中州
 より
 来る
 人
 多
 し

半も希なるに
 増く化の家へ大
 飛く使をきく
 なる間となくへい又
 家親のよけい

源氏物語

秋の夜更け
 月影の
 照る
 庭の
 木立
 影を
 長く
 伸ばし
 人の
 心も
 憂ふ
 秋の
 風は
 涼し
 げに
 吹く
 空は
 雲
 なく
 星の
 光も
 見え
 ぬ

壺桐

春の
 朝日
 照る
 庭の
 花は
 咲き
 誇り
 人の
 心も
 喜ぶ
 春の
 風は
 暖か
 げに
 吹く
 空は
 青く
 鳥の
 声も
 聞こ
 える

秋の
 夕陽
 照る
 庭の
 木立
 影を
 長く
 伸ばし
 人の
 心も
 憂ふ
 秋の
 風は
 涼し
 げに
 吹く
 空は
 雲
 なく
 星の
 光も
 見え
 ぬ

本巻

春の
 朝日
 照る
 庭の
 花は
 咲き
 誇り
 人の
 心も
 喜ぶ
 春の
 風は
 暖か
 げに
 吹く
 空は
 青く
 鳥の
 声も
 聞こ
 える

九月
 花は
 咲き
 誇り
 人の
 心も
 喜ぶ
 春の
 風は
 暖か
 げに
 吹く
 空は
 青く
 鳥の
 声も
 聞こ
 える

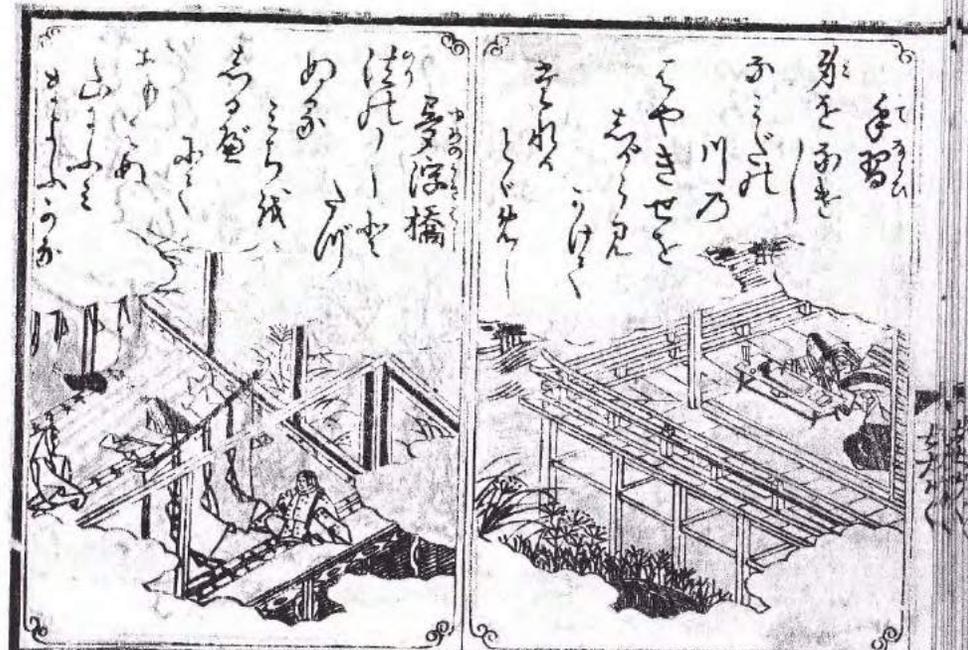
十月
 夕陽
 照る
 庭の
 木立
 影を
 長く
 伸ばし
 人の
 心も
 憂ふ
 秋の
 風は
 涼し
 げに
 吹く
 空は
 雲
 なく
 星の
 光も
 見え
 ぬ

十一月
 朝日
 照る
 庭の
 花は
 咲き
 誇り
 人の
 心も
 喜ぶ
 春の
 風は
 暖か
 げに
 吹く
 空は
 青く
 鳥の
 声も
 聞こ
 える

十二月
 夕陽
 照る
 庭の
 木立
 影を
 長く
 伸ばし
 人の
 心も
 憂ふ
 秋の
 風は
 涼し
 げに
 吹く
 空は
 雲
 なく
 星の
 光も
 見え
 ぬ



女大學
 一史女子の成長
 一他人の家
 一男始
 一伝のなれん



源氏物語の一条院の天上東門院へめり
 らしき双葉やけつとるさきとて人の宮女
 世哉やに伝つきしとるれし式や石山寺へ
 ありてはなれり世すなりしも八月十八
 夜の本始めはつりて知とすしとるる
 事くすまはすはあつりのあまを伝はつる
 事とすしより伝のまきくしふくし
 出たのさきとるすまはれしに今世の八月
 十五夜やとわり式やの祝聖者の化身
 かりとすしうもええとすし源氏七歳
 の清母よりま文よりひ何とて清法
 と伝とつとるしその伝は清法よりさ
 事りては清法よりさつとるさつとるさ
 事りては清法よりさつとるさつとるさ
 とありしし源氏六十帖中十帖も
 卷の五十四帖あるさつとるさつとる
 事りては清法よりさつとるさつとる

婦人の心をあらうもの
 たいと靴をききて男は
 お生をゆん(ひ)のえむを
 して目をあつてこのかま
 あつておやのそへへか
 とあつてぬきおきか
 ぼろぼろのくも
 うらへ海のをき
 山はきか
 のる
 小舟天祥の海
 海とのたに
 びと
 うくく
 おい
 あはれ
 めて

益軒貝原先生述
 誠なる女子の
 知んぬあはれ
 知んぬあはれ

天祥全集
 林乃田
 の意乃
 我衣もは
 持統天皇
 まさしく
 白く
 衣も
 わる
 持統天皇
 まさしく
 白く
 衣も
 わる



世嗣年
 夫はよく外なれを夫のゆく
 夫の上おあはれはまの位なり
 阿婆女はくはなり
 世はくはれを不孝の
 敬服友の情はれ

九河内探幽



董永と七娘の物語... 母とては... 董永は...



董永は... 七娘は... 董永は...

紀女則



紀女則... 紀女則... 紀女則...

紀女則... 紀女則... 紀女則... 紀女則...